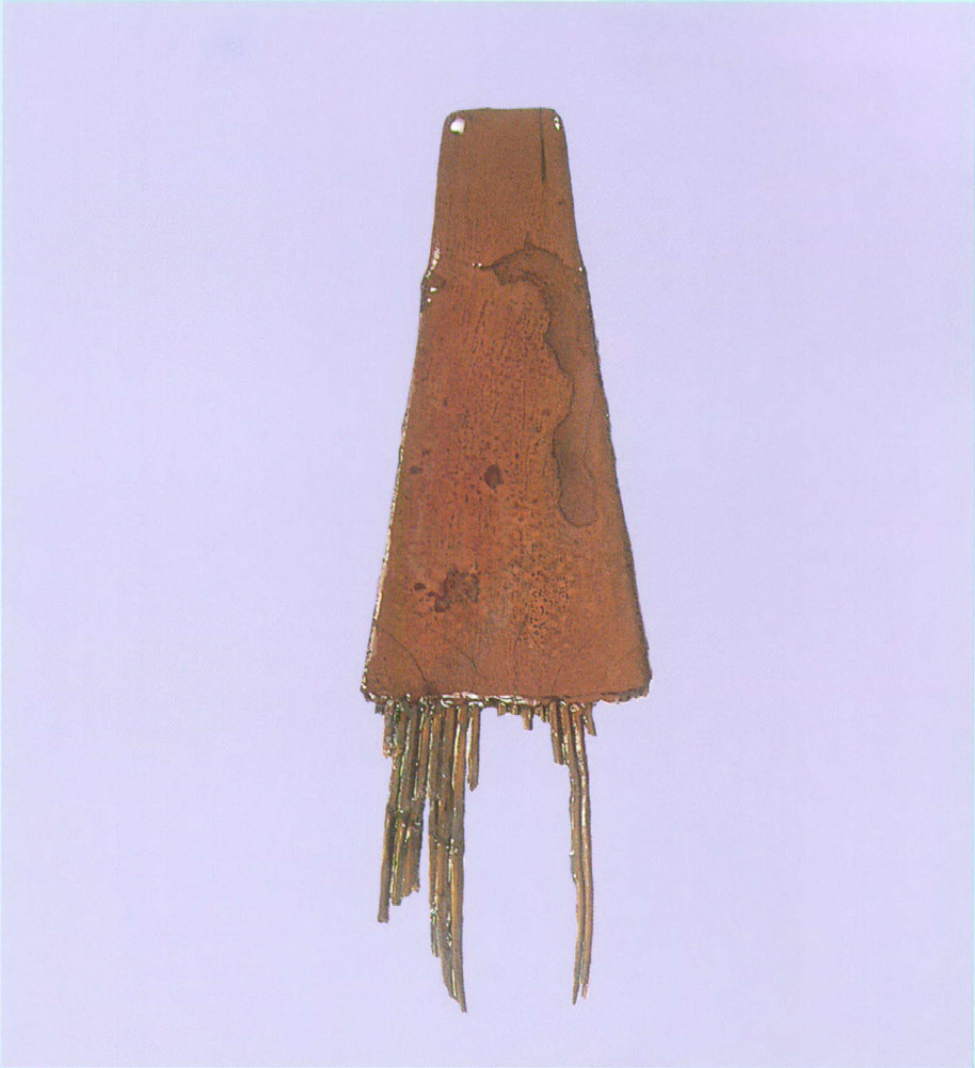
テーマ4

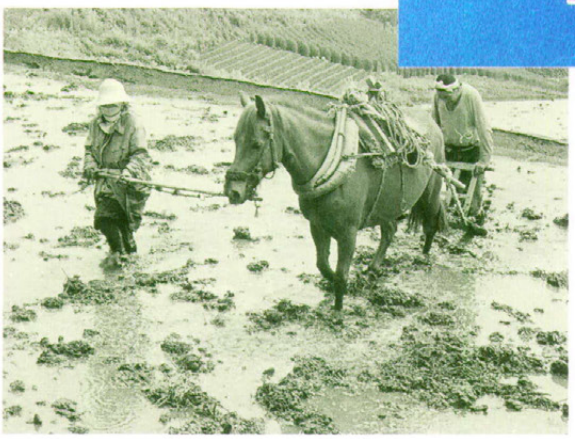
工夫



漆塗りの竪櫛　長野市松原遺跡（長野県埋蔵文化財センター提供）

日常生活に工夫をこらした人びと

木を素材にしてつくられたさまざまな食器



まぐわをひいて代かきをする
1950年前半　長野市芋井（松瀬孝一氏提供）

◆植物や動物の利用

わたしたちの食生活に欠かせないお椀やおはし、みなさんの家にあるこうした食器は、何でできていますか。近ごろは、プラスチック製の手軽で扱いやすい道具が多くなっています。しかし、ケヤキの挽物に漆を塗った椀や柳のはしなどのように、野山に育つ草木を素材にした食器には、ぬくもりや味わいがあります。

動物も、物資の運搬や農作業をはじめ、人間の暮らしにさまざまなかたちで役立ってきました。現代では、警察犬や盲導犬、狩猟犬など一部を除いて、ペットとして扱われることが多くなっています。いっぽうで、動植物の種の絶滅や自然破壊など、人間と動植物との関係をめぐるさまざまな問題もおこっています。

◆リサイクルとゴミ問題

たいせつに使っていた道具でも、やがては古くなり壊れて捨てられます。近ごろは、ゴミの処理を円滑に進めるとともに、再生できる資源を活用するため、市町村でゴミの分別収集などがおこなわれています。また、各種イベント会場でおこなわれるフリーマーケットなどではリサイクル活動も盛んです。

ところが、心ない人たちによって捨てられた空缶が道路端や空地に転がり、公園やキャンプ場には紙クズなどが散乱する光景もみられます。また、「夢の島」をつくって燃えないゴミを処理し

貝殻の厚い層　宮城県鳴瀬町里浜貝塚（東北歴史資料館提供）
縄文人が食べたあと捨てた貝殻は、長い年月の内に厚さ2.5mにもたっした。貝塚の細かい観察によって、季節ごとに変わるメニューの内容を知ることができる。

道ばたに散乱する空き缶類　更埴市屋代

分類されたゴミ袋　松本市寿

てきた大都会では、ふえ続けるゴミ対策に苦心しているようです。このように、ゴミ問題は社会の大きな課題になっています。

◆自然とともにくらした人びと

わたしたち人間の歴史の、およそ九九パーセントを占めるのは原始時代です。そのころ人びとは、自然や大地の恵みに頼って暮らしをたて、動植物を活用しつつこれと共存する暮らしをしていました。

およそ四〇〇万年前、二本足で歩きはじめてまもないヒトは、地面に転がる石ころや木の枝を、わずかに加工して利用していたことでしょう。やがて、人びとは使いがってや目的に応じたさまざまな道具をつくり出しました。さらに、道具の働きを効果的にするため、道具の役割にあった材料を選ぶようになりました。動物の骨も利用しています。壊れた道具もすぐに捨ててはしまわず、だいじに修復して使ったり、別の形につくり直して再利用したりすることもあったようです。またゴミ捨て場のようすからは、役目を終えた道具に対するかれら特有の考え方を垣間（かいま）みることができそうです。

原始時代の人びとは、身のまわりの自然や自分たちがつくり出した道具類をどのように活用してきたのでしょうか。遺跡（こんせき）に残されたさまざまな道具や生活の痕跡のなかから、快適な暮らしをおくるための工夫のようすを探ってみましょう。

草木はさまざまな道具に利用されたの

福井県三方町鳥浜貝塚の風景（福井県立若狭歴史民俗資料館提供）　橋の手前が鳥浜貝塚
鳥浜貝塚は三方湖のほとりにある低湿地遺跡。縄文時代前期の木製品や繊維製品、種子などが豊富に出土した。

◆ヒトと道具

ヒトの祖先は、石ころや棒切れに始まり、こん棒や槍、掘り棒、石の握槌などを使うようになり、石と木はヒトの誕生とともに道具の材料となりました。

日本では、約五万年前に旧人が加工した板が、兵庫県明石市でみつかっています。約三万年前以降の新人の時代になると、木の柄をつけた槍・斧・ナイフ・彫刻刀など、いろいろな石器がそろいます。

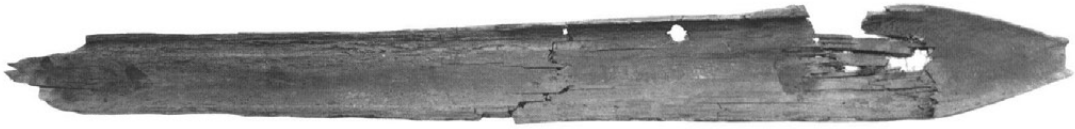
◆盛んな植物資源の利用

気候の温暖化とともに、生活に役立つ植物資源がふえました。環境が安定した約六〇〇〇～五〇〇〇年前の縄文時代前期には、まさかりやかんなの役目を果たす磨製石斧が発達し、さまざまの木製品がつくられます。福井県三方町鳥浜貝塚のみごとな木製品は、縄文人の木工技術の水準を示しています。

縄文時代の木の道具には、鉢・皿などの容器や食器、しゃもじ、火おこし具、槌、斧の柄、弓矢、刺突具、丸木舟、櫂、櫛、琴などがあり、トーテム・ポールのような彫刻した柱も出土しています。

福井県鳥浜貝塚の木製品・繊維製品

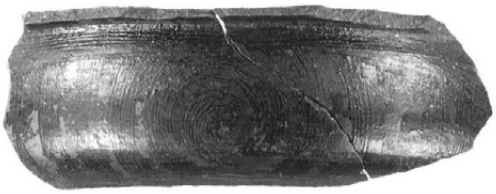
（福井県立若狭歴史民俗資料館蔵）



丸木舟　長さ608cm

漆塗りの櫛　長さ9.2cm

木槌　長さ48cm

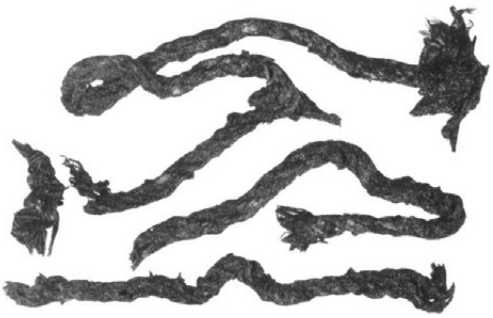


漆塗りの鉢形土器　長さ22cm

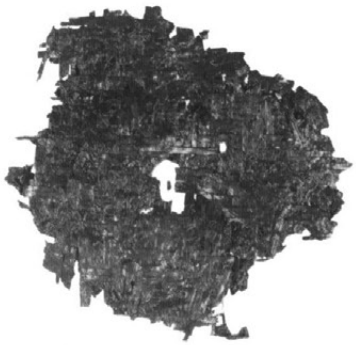
しゃもじ　長さ18.5cm

皿　口径40cm

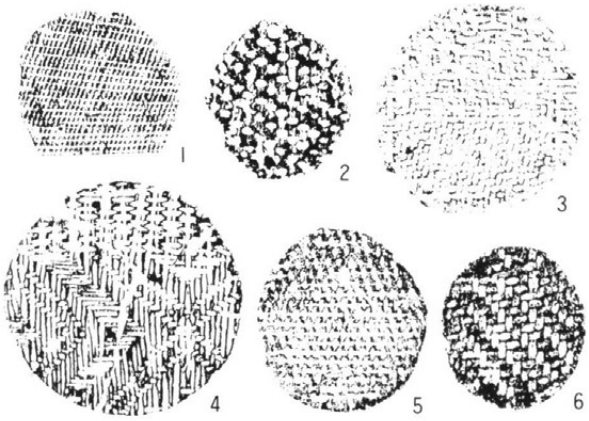
石斧の柄　長さ40cm



縄　約5分の1



編み物　約5分の1



縄文土器の底についた編み物のあと（1：3）
1・2　下高井郡野沢温泉村岡ノ峯遺跡（『岡ノ峯』1985年）
3・4　下高井郡山ノ内町佐野遺跡（『佐野』1967年）
5・6　上伊那郡宮田村田中下遺跡（『田中下遺跡』1994年）

編布の素材となるカラムシ　下水内郡栄村

編布を編む道具　復原（戸倉町教育委員会蔵）

フジやアケビのつる、竹などを編んでつくった道具には、笊・籠や敷物があります。またアサ（大麻）やアカソ（イラクサ）、カラムシ（苧麻）のせんいをよって糸をつくり、それを編んで布をつくりました。

漆の利用は縄文時代前期に始まります。漆は接着剤としたり、塗料として土器や木器を飾るほか、籠をぬり固めて容器をつくることなどにも利用されました。

◆鉄器の普及とさまざまな木製品

弥生時代から古墳時代には、水田や用水路の開発、倉庫の建造などで木材の消費が拡大します。鉄器の普及により、丸太材加工のほかに、割り板材を使うようになります。

長野盆地でも弥生時代以降になると、千曲川沿岸の低湿地遺跡から、多くの木製品が発掘されています。高床倉庫にかける梯子、鍬、鋤、田下駄、杵、槌などの農具・工具、鉢や高坏、弓、矢、盾、舟、櫛、琴、鳥形木製品など、さまざまな遺物があります。五・六世紀には、機織りの道具、薄板を曲げてつくった箱、机、椅子、馬の鞍・鐙もみられます。時代の動きと技術の進歩によって、木や草の利用も変化をとげました。

弥生時代（1～3）・古墳時代（4～6）の木製品

（長野県埋蔵文化財センター提供）

1

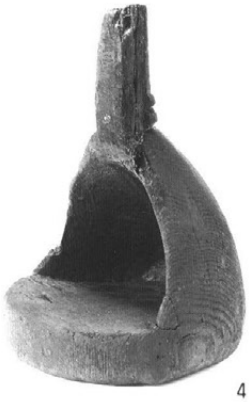
漆塗りの高坏（たかつき）　高さ18cm
長野市松原遺跡

2

漆塗りの竪櫛（たてぐし）　長さ15.8cm
長野市松原道跡

3

漆塗りの片口鉢（かたくちはち）　口径21.2cm
長野市春山B遺跡



4

鎧（あぶみ）　高さ24.8cm
長野市榎田遺跡

5

椅子（いす）　脚部の長さ47.3cm
長野市榎田遺跡

6

鞍（くら）　幅47.3cm
長野市榎田遺跡

暮らしに役立った動物もいたの

上：竪穴住居の屋根裏にかけたシカの頭がい骨
長野県立歴史館

左上：イノシシの骨が出土した竪穴住居跡

左下：イノシシの骨　更埴市屋代遺跡群
（長野県埋蔵文化財センター提供）

◆骨角を利用した生活の道具

更埴市屋代遺跡では、縄文時代の竪穴住居跡からイノシシの頭がい骨が集中して出土しました。これらは、食生活はもちろんのこと生活のいろいろな場面で役立つものをあたえてくれた動物の神に対して、縄文人がおこなった感謝のまつりの跡と考えられています。

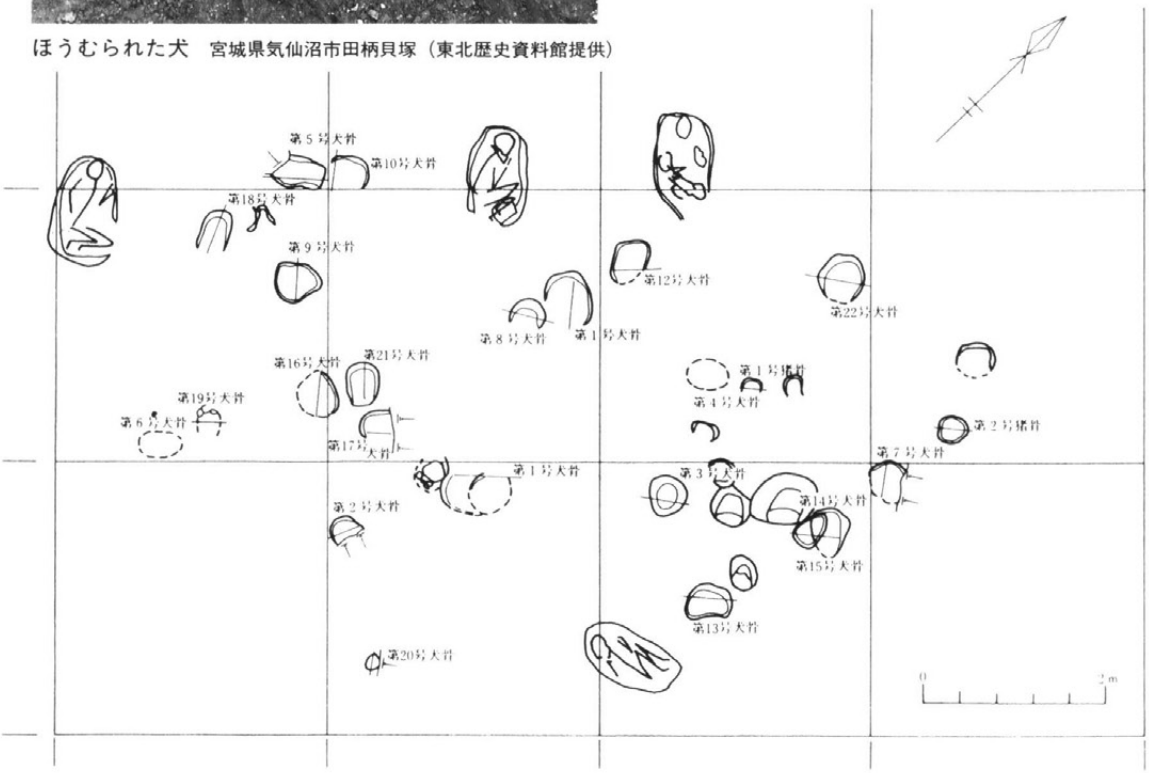
先土器時代、信濃町野尻湖周辺でオオツノシカなどを狩りしていた人びとは、骨や角から槍先やナイフをつくっていました。縄文時代にはいり、北相木村栃原岩陰遺跡にはシカの骨でつくった釣り針やかんざしがあり、明科町北村遺跡にほうむられた人はイノシシの牙でつくった胸飾りや腕輪をしていました。また弥生時代に占いに利用されたシカの角や骨が、更埴市生仁遺跡でみつかっています。

◆狩人と犬

犬は匂いをよく嗅ぎ分けるし、なにより人になつきやすい性質をしています。そのため、世界のあちこちの狩人たちは、昔から犬とともに暮らしてきました。

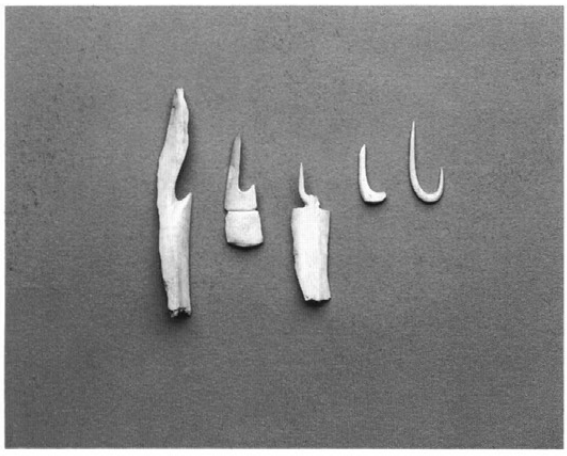
全国には、縄文時代の犬のお墓が発見された遺跡が

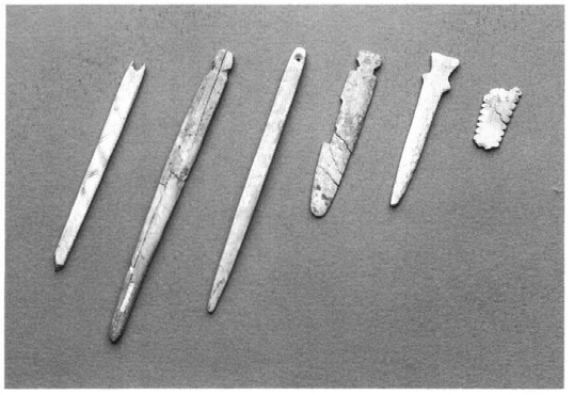
ほうむられた犬　宮城県気仙沼市田柄貝塚（東北歴史資料館提供）



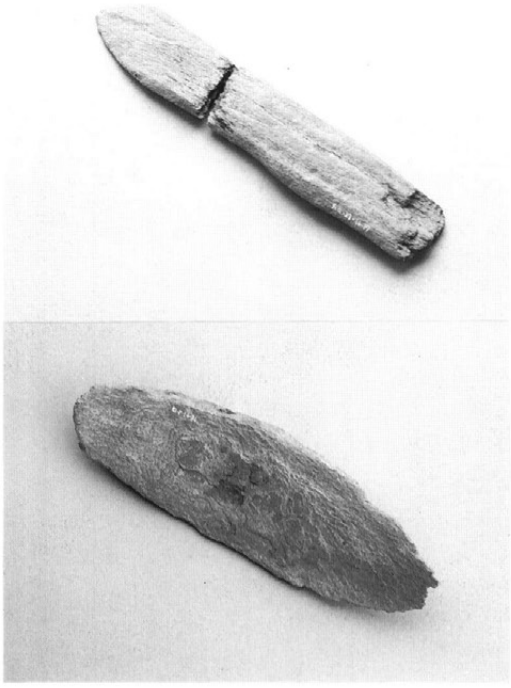
縄文時代の人と犬の共同墓地（宮城県教育委員会『田柄貝塚』1986年を修正）

折れた犬の骨　宮城県石巻市南境貝塚（茂原信生氏提供）





上：釣り針　右長さ2.5cm　下：ヘアピン　左長さ7.0cm　南佐久郡北相木村栃原岩陰遺跡　複製（原資料　北相木村教育委員会蔵）



上：槍先　長さ14.1cm
下：スクレイパー　長さ17.9cm
上水内郡信濃町立が鼻遺跡　複製
（原資料　信濃町立野尻湖博物館蔵）
どちらもナウマンゾウの骨を利用した道具である

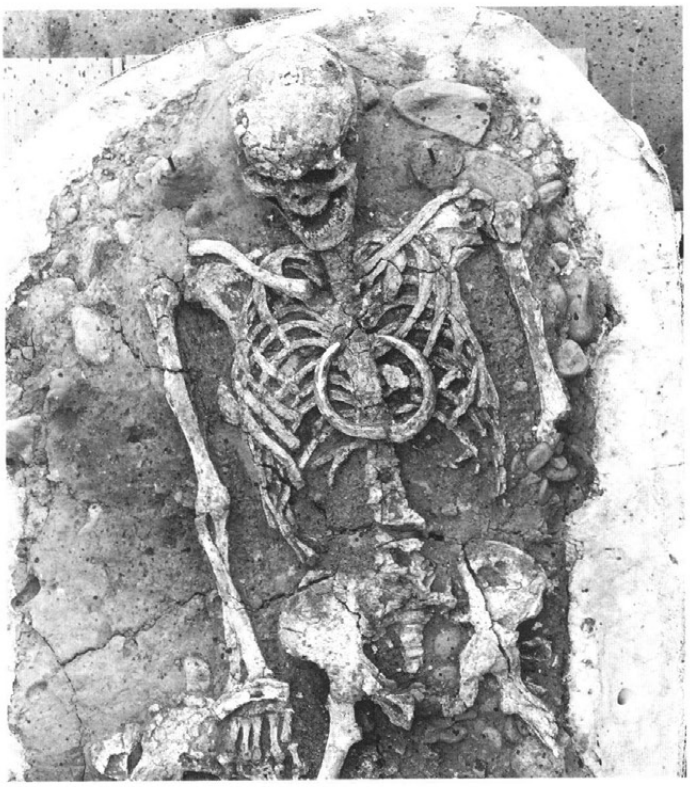
一六〇ヶ所あります。宮城県気仙沼市田柄貝塚では、人間の墓地の中につくられていました。また、千葉県船橋市高根木戸遺跡では、犬が人間といっしょにほうむられていました。縄文人は狩りの友として犬をとても大切にしていたことがわかります。

ところが、弥生時代以降の農耕社会になると犬の墓は激減します。広島県福山市草戸千軒町遺跡でみつかった室町時代の犬の頭がい骨は、人の手で打ち割られています。このころは犬を食べていたようです。

◆農民と動物たち

長野市石川条里遺跡では、古墳時代の水田から鳥形の板が発見されました。鳥は空をかけることから、天にある神の国と地上の国を結ぶ使者と考えられていたようです。おそらく本物の鳥のかわりに、稲の豊作をもたらす霊をよぶお祭りで使われたのでしょう。

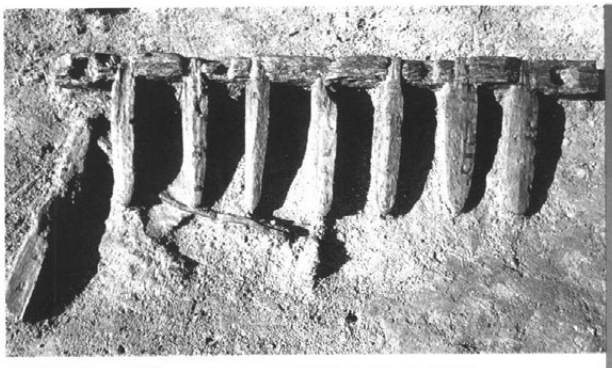
群馬県子持村白井大宮遺跡の砂に埋もれた古墳時代の水田では、人の足跡といっしょに馬の足跡が発見されました。福岡県北九州市カキ遺跡の水田からは、牛馬に曳かせる馬鍬が出土しています。また石川条里遺跡からも平安時代の馬鍬が発見されています。牛馬は、古墳時代から農耕に利用された動物だったのです。



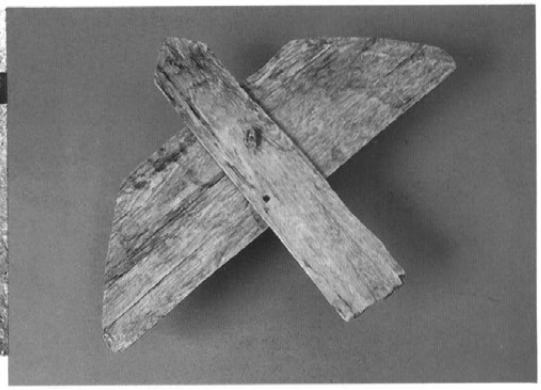
イノシシの牙を利用した胸飾りと腕輪
明科町北村遺跡（長野県立歴史館）

畑にのこされた馬の足跡とその調査
群馬県白井大宮遺跡
（群馬県埋蔵文化財調査事業団提供）

うらないに使ったシカの肩の骨　長さ15.5cm
更埴市生仁遺跡
（更埴市教育委員会蔵）



古墳時代の馬鍬　幅1.3m　福岡県北九州市カキ遺跡
（北九州市教育文化財団埋蔵文化財調査室提供）



鳥形木製品　幅48cm　長野市石川条里遺跡
（長野県埋蔵文化財センター提供）

壊れてしまった道具は すぐに捨ててしまったの

補修の穴のある耳飾り　右　長さ3.9cm　左　長さ3.7cm　佐久市栗毛坂遺跡
耳飾りをつくる途中で割れてしまったものであろう。しかし、両方に穴をあけ、ひもで結んで目的を達成した。

◆修理の工夫

今の日本にはものがたくさんあって、簡単に手に入れることができるようになりました。そのいっぽうで、ちょっと壊れただけでもすぐに捨ててしまって、ものを大切にする気持ちが薄れてきています。壊れた道具を修理しながら使った時代など、想像もできない人がふえているのではないでしょうか。

ところで原始時代の人は、ものが壊れてしまったらどうしたのでしょうか。当時はものをとても大切にし、たとえ壊れても修理の工夫をしていたことが、多くの資料からわかってきました。

たとえば、縄文土器にひびが入ると、その両側に小さな穴をあけて紐でしっかりとしばって使っていますし、耳飾りが二つに割れてしまっても、両方に穴をあけて紐で結んでいます。そのほかにも、天然のアスファルトや漆などを接着剤として利用する知恵をもっていました。とくにアスファルトは、日本海側の新潟県から秋田県にかけての限られた地域にしか産出せず、交易品として各地に供給されたものでした。長野県内

補修した紐が残る土器片　福井県三方町鳥浜貝塚
（福井県立若狭歴史民俗資料館蔵）

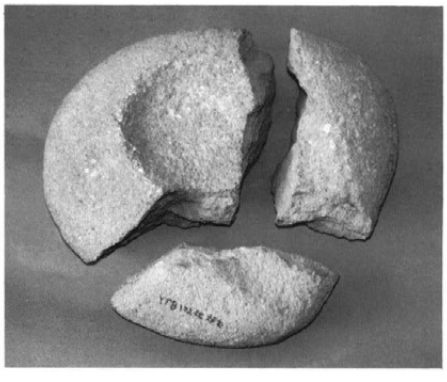
補修孔のある土器　塩尻市吉田向井遺跡
土器にひびが入っても、両側に穴をあけ、紐で結んで補強して使っていた。

埋甕のある住居　茅野市棚畑遺跡（茅野市尖石考古館提供）
住居の出入り口に、写真のように壊れた土器を埋める場合がある。へその緒や胎盤が入れられたとされる。

壊れた土器を利用してつくられた炉
塩尻市山の神遺跡

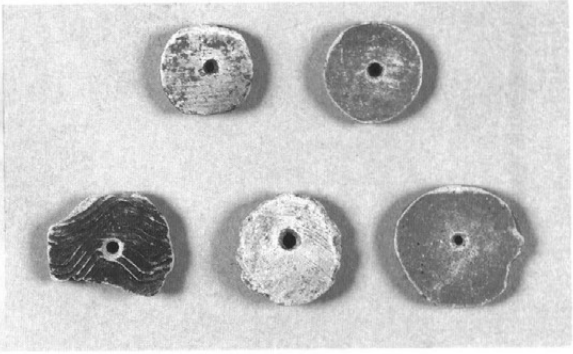
壊れた石皿でつくられた炉とその石皿
茅野市棚畑遺跡（茅野市尖石考古館提供）

壊れた土器を利用してつくられた炉
諏訪郡原村居沢尾根（いざおね）遺跡



土器の破片でつくられた錘　岡谷市花上寺遺跡
（岡谷市教育委員会蔵）

再加工された磨製石斧　接合長　15.5cm
上水内郡牟礼村明専寺遺跡（牟礼村教育委員会蔵）



土器の破片でつくられた紡錘車　中野市七瀬遺跡

では長野市宮崎遺跡、南佐久郡南牧村中ノ沢遺跡出土の土器にその付着が認められています。

◆壊れても別の用途が待っている

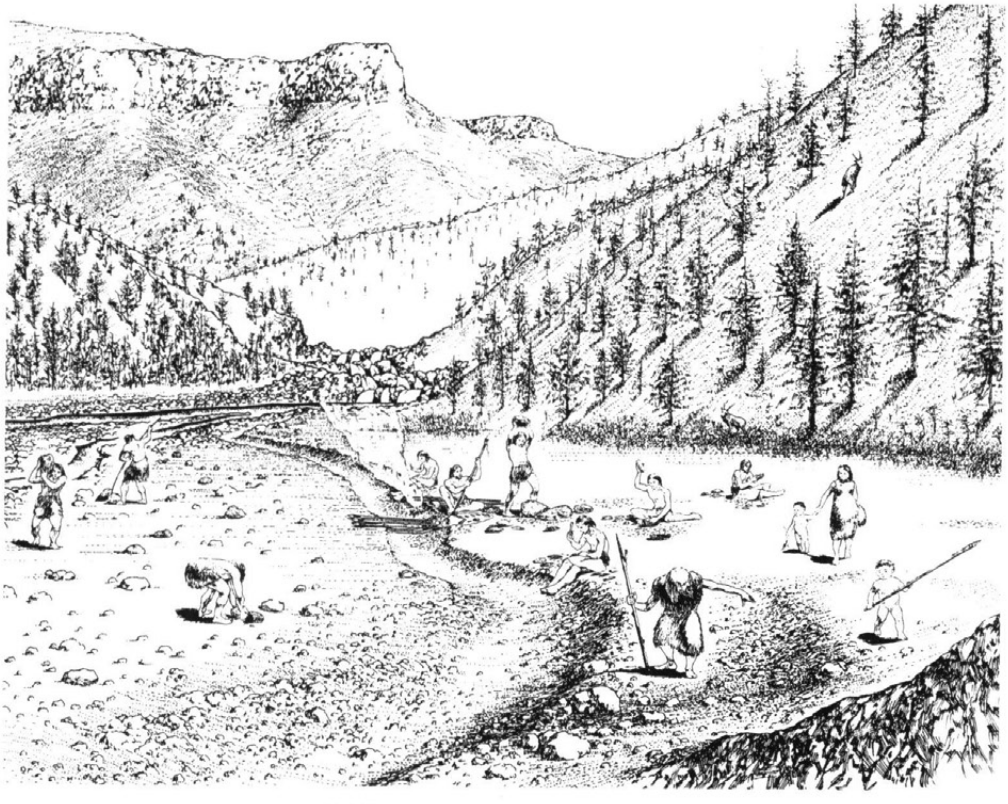
縄文時代や弥生時代には、部分的に壊れてしまった土器も、形の残った部分を囲炉裏、つまり炉の中に埋めて熱効率を高める役割を果たしました。木の実などをすりつぶす石皿の破損品も、炉の石に再利用しています。また、縄文人は、家の出入り口にへその緒や胎盤を埋めて、そこを踏めばその子は丈夫に育つ、という風習をもっていたようです。それを納める容器として、欠けた土器を再利用していました。このように、本来の機能を失っても、別の目的や用途に使う工夫もこらしていました。

◆別の形に変身利用

縄文人や弥生人は、土器の破片も無駄にはしなかったようです。たとえば、破片のまわりをみがいて形を整え、その両端に刻みを入れると魚をとるときの錘になるのです。弥生時代には、破片のまん中に穴をあけて糸を紡ぐ紡錘車の部品にしています。また、折れてしまった石の斧も、刃の部分は楔に、頭は槌として再利用しました。

ものを大切にする心を見習いたいものですね。

ゴミはどうやって処理していたの



先土器時代の石器製作跡　佐久市下茂内遺跡（長野県埋蔵文化財センター『下茂内遺跡』1992）
約1万3千年前の石器製作のキャンプ跡に、300本のつくりかけの石槍と10万点をこえる石くずが残っていた。

◆移動生活とゴミ問題

原始時代のゴミはふつうの条件ではほとんどくさってしまい、発掘される土器や石器は当時の不燃ゴミともいえます。

大型動物を追って移動をくり返していた、先土器時代の狩人たちの遺跡は、肉を調理した焼け石などが数十メートルの範囲に散らばる、キャンプの跡のようなものです。石器づくりの石くずや食べ物のゴミは置き去りにして、必要最小限の道具をもって移り歩く生活に、決まったゴミ捨て場はいらなかったことでしょう。

◆定住とゴミ捨て場

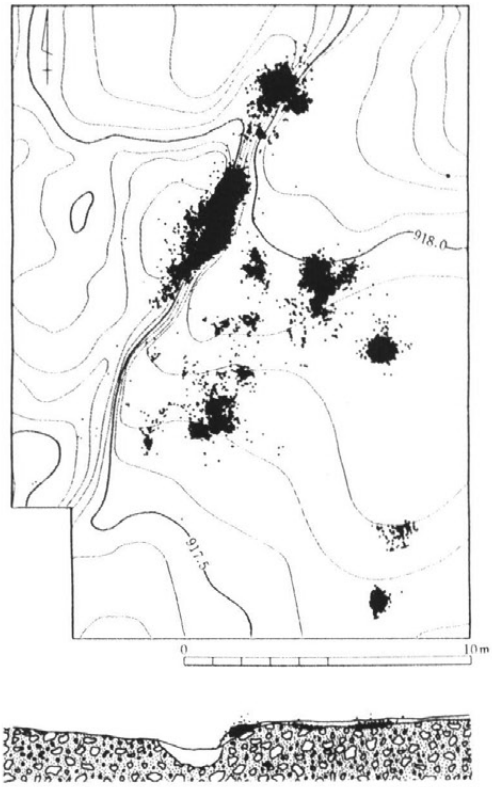
暖かい縄文時代になって土器が発明され、木の実や山菜、魚・貝など、豊かな自然のめぐみを利用できるようになると、定住的な集落ができます。五人ほどの縄文人家族が一年間に必要とする食料やたきぎ、水などのあらゆる物資の量は、一〇トンにもなるといいますから、ゴミ捨て場は欠かせなくなります。

もっとも多いのは、廃屋となった竪穴住居跡のくぼみをゴミ穴にする方法で、道具を置き去りにしたり、

粗割された素材

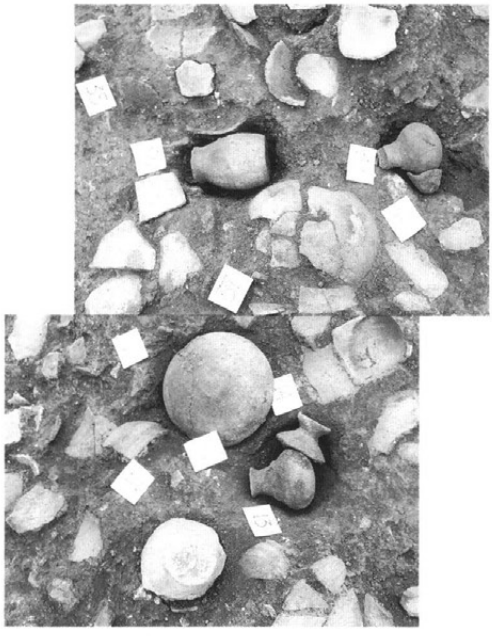
細かい石くず

製作中の石槍　以上　佐久市下茂内遺跡

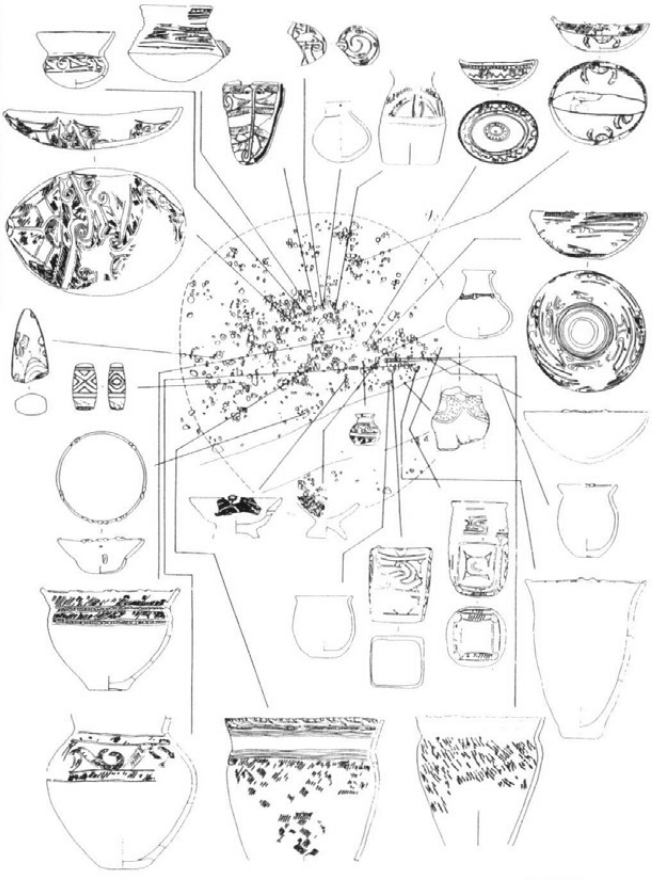


石槍・石くずの分布　佐久市下茂内遺跡
（長野県埋蔵文化財センター『いま信濃の歴史はよみがえる』1991年）
この分布図をもとに右の復原画が描かれた。

縄文時代後期の廃屋墓
長野市村東山手遺跡
（長野県埋蔵文化財センター提供）
敷石住居の廃屋に、一体の成人が石を抱き、ひざを曲げた屈葬の姿勢でほうむられていた。



土器の出土状態　戸倉町円光房遺跡
（戸倉町教育委員会提供）
土器や石剣、土偶を祭りの場所に置き去りにしたのだろうか。土器にはこわれていないものも多い。



縄文時代晩期の土器集積遺構（約1：110）埴科郡戸倉町円光房遺跡
（戸倉町教育委員会『円光房遺跡』1990年）

埋まりかかった穴に投げこみます。また、台地の斜面や沢の一部をゴミ捨て場にすることもよくおこなわれます。集落の一定の場所に、土器などが積みかさなっている場合もあります。

海岸部の遺跡には貝がらや魚、獣の骨を捨てた貝塚があります。この中にはしばしば人も埋葬されました。

これらのゴミ捨て場には、こわれていない土器がたくさん含まれていたり、土偶や石剣など祭りの道具が混じっていることもあるので、縄文人は、道具や貝がら、遺体など、役目を終わったもの、命を失ったものに深い祈りをこめて見送ったのかもしれません。

◆開拓の時代のゴミ

弥生時代以降、集落がより定着的なものとなりますと、人口の増加とともに、消費する資源とゴミの量は増えつづけたことでしょう。

ゴミの捨て方は竪穴住居跡をゴミ穴に利用することがふつうで、集落の中の大きな溝に投げこむこともあります。しかし、墓や祭りの場は、ゴミ捨て場からは独立して設けられているので、使い終えたものに対する気持ちは縄文時代とは異なっていたのでしょう。

上：一軒の竪穴住居跡から出土した土器
諏訪郡原村居沢尾根遺跡
約4500年前、竪穴住居跡をゴミ穴に利用して、40個以上の土器が投げこまれた
右：多くの遺物が投げこまれた縄文時代中期の竪穴住居跡

弥生土器が投げこまれた大きな溝
長野市松原遺跡（長野県埋蔵文化財センター提供）
弥生時代後期の集落にある、幅40m、深さ２m以上の溝のふちに、大量の土器が投げこまれている。

溝から出土した土器の復原作業

石に働きかけた遺跡

◆巨石のなかの遺跡

太田垣外遺跡は、岐阜県境にある木曽郡南木曽町田立に位置し、一九九四年に発掘調査されました。縄文時代中期後半の住居跡一九軒と後期の住居跡二軒のほかに、多数の柱穴や墓が出てきました。

調査区域内には大人の背丈ほどもある一辺一～四メートル、高さ二メートルの花崗岩の巨岩が一〇〇個ほども露出しており、この巨岩を中心に集落が形成されるというきわめて特異な立地の遺跡であることが、わかりました。

発掘された琥珀玉
縄文時代の琥珀はヒスイとならんで貴重な石で、その出土数は少ない。

◆石を敲打する集団の力

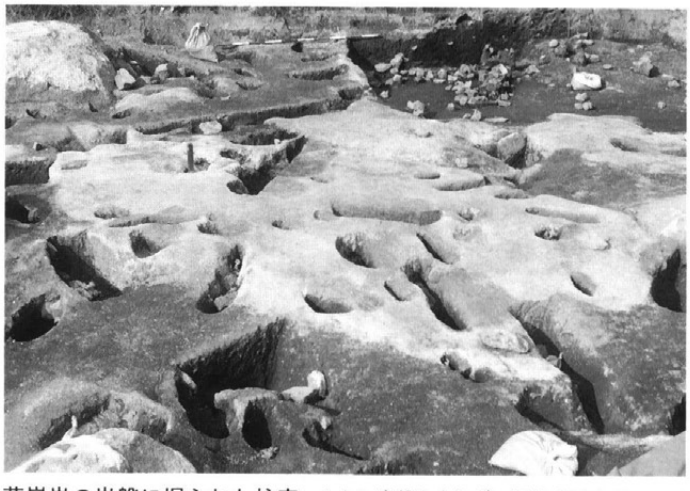
太田垣外遺跡で石に働きかけた特徴的な遺構は二種類あります。ひとつは大きな花崗岩を打ち割ってつくった中期後半（約四五〇〇から四〇〇〇年前）の竪穴住居です。

この竪穴住居は遺跡の中心部にあり、二～三メートルもある花崗岩の巨岩の半分から三分の一を打ち割った部分を壁として利用し、直径七メートルもあるこの遺跡最大の竪穴住居を築いていました。

いまひとつは、同時期の花崗岩の岩盤に五〇個近い大小の穴（径二〇～六〇センチ、深さ一〇～六〇センチ）をあけた遺構で、石斧のような加工痕も確認されました。

かたい花崗岩の巨岩を打ち割ったり、岩盤を掘りくぼめていく技法は、敲打技法とよばれています。敲打というのは、「打つ、敲く」という単純な動作を数十回、数百回と繰りかえすことで、ここについやされた労働力はかなりのものでした。個人労働では不可能で、強力な指導力のもとに人びとが結束し、共同の集会場づくりのために石を敲いた姿が浮かんできます。

こうしてみると太田垣外遺跡は、花崗岩の巨岩や岩盤の露出する条件の悪い遺跡というよりは、むしろ集団の意志によって最初からここを生活場所として選び、集団労働によってそれらを積極的に活用して、住生活や社会生活に取り込んだ珍しい遺跡といえます。



花崗岩の岩盤に掘られた柱穴　かたい岩盤を少しずつ掘りくぼめていって柱の穴をつくり出している。

協力者のみなさん

（五十音順、敬称略）

愛知県　茂原信生
愛知県埋蔵文化財センター
上松町　合戸一美
飯田市教育委員会
飯田市上郷考古博物館
飯田市　渋谷恵美子
上田市教育委員会
上田市立信濃国分寺資料館
上田市　上田典男
上田市　倉沢正幸
上田市　中沢徳士
岡谷市教育委員会
岡谷市　会田　進
大坂大学考古学研究室
大坂府　北野耕平
神奈川県　馬事文化財団
川上村　由井茂也
北九州市教育財団　埋蔵文化財調査室
群馬県埋蔵文化財調査事業団
群馬県　子持村教育委員会
群馬県　桜場一寿
更埴市教育委員会
更埴市　矢島宏雄
佐賀県教育委員会
佐久市教育委員会
静岡市立登呂遺跡博物館
島根県教育委員会
島根県埋蔵文化財調査センター
諏訪市教育委員会
諏訪市　高島俊廣
諏訪市　宮坂光昭
高森町教育委員会
高山村教育委員会
茅野市尖石考古館
茅野市　小林深志
千葉県　籾倉克幹
東京国立博物館
東京都　毎日新聞社
東京都　平凡社
東京都　ムラヤマ
戸倉町教育委員会
戸倉町立さらしなの里歴史民俗資料館
戸倉町　翠川泰弘
中野市　谷　和隆
長野県埋蔵文化財センター
長野市教育委員会
長野市埋蔵文化財センター
長野市立博物館
長野市　青木和明
長野市　青木一男
長野市　臼居直之
長野市　真田宝物館
長野市　信濃毎日新聞社
長野市　寺内隆夫
長野市　贄田　明
長野市　西島　力
長野市　松瀬孝一
長野市　山口　明
野尻湖遺跡調査団
日義村　神村　透
福井県立若狭歴史民俗資料館
福井県　畠中清隆
松本市立考古博物館
松本市　小原　稔
松本市　宮川速雄
三郷村　木船清
宮城県　東北歴史資料館
牟礼村教育委員会
牟礼村　横山かよ子
横浜市ふるさと文化財団
和田村教育委員会

執筆者

白沢勝彦
平林　彰
福島厚利
堀内規矩雄
三上徹也
宮下健司
山極　充
綿田弘実

あとがき

長野県立歴史館では、毎年一冊ずつ、テーマを決めてブックレットを発行しています。

二冊めのこの本は、先土器（旧石器）時代から古墳時代までの長野県の歴史について、小学生や中学生にも興味をもって読んでもらえるようにと、主として考古学の成果に立って企画・編集したものです。今回はとくに、環境、災害、戦争、工夫という現代的なテーマに沿って、先土器から古墳時代にいたる人びとの生活をふりかえってみました。

本書を参考にして、もっと深く歴史を勉強してみたいというみなさんは、ぜひ何回でも歴史館に来てください。歴史館には、歴史の図書がそろっていますし、土器・石器などの出土品がたくさんあります。また、専門の職員がみなさんの質問に答えてくれます。大いに活用してください。

本書のために、貴重な写真や資料などをこころよくご提供してくださった多くの方がたに、あつくお礼を申し上げます。

一九九六年三月

長野県立歴史館

利用案内

〔開館時間〕

午前九時～午後五時

（ただし、入館時間は午後四時三〇分まで）

〔休館日〕

月曜日（祝日・振替休日に当たるときは火曜日）

祝日の翌日（日曜日にあたるときは開館）

十二月二十八日～一月三日

〔常設展観覧料〕

	一般	高校・大学生	小・中学生
個人	三〇〇円	一五〇円	七〇円
団体	二〇〇円	一〇〇円	五〇円

（団体二〇名以上）

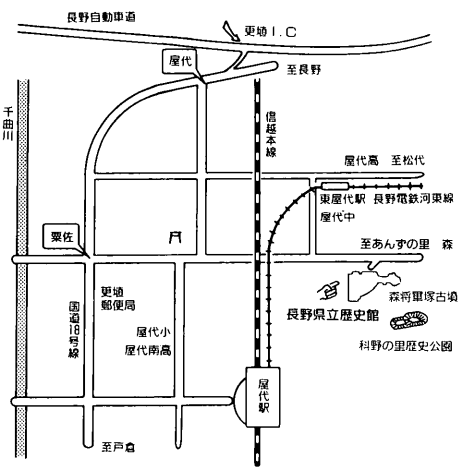
県内の小・中・高校生が、学校の教育活動として観覧するときは、減免になります。

〔交通案内〕

信越本線屋代駅から徒歩二五分

長野電鉄河東線東屋代駅から徒歩二〇分

長野自動車道更埴ＩＣから車五分



長野県立歴史館

信濃の風土と歴史② **原始時代のシナノ**

一九九六（平成八）年三月三十日発行

編集・発行　長野県立歴史館

〒三八七　長野県更埴市屋代清水二六〇―六

科野の里歴史公園内

電話(代)〇二六―二七四―二〇〇〇

印　刷　蔦友印刷株式会社